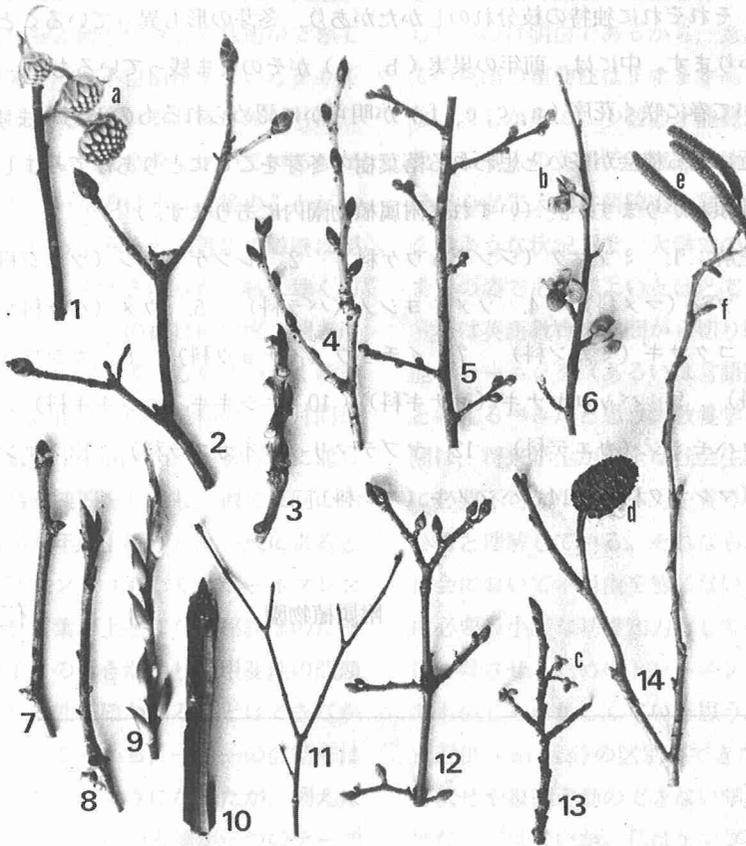


廣報

東京大学理学部

落葉樹の冬芽



目次

表紙の説明	邑田 仁	1
英国で英語について思ったこと	浜口 宏夫	2
物理学教室に着任して	井野 正三	3
坪井先生のこと	斎藤 正徳	5
「三崎の重さんのこと」	木下清一郎	6
〈学部消息〉		9

表紙の説明

落葉樹の冬芽

春から秋にかけて青々と葉を繁らせ、花を咲かせた落葉樹も、今はすっかり葉を落してしまい、一見どれも同じように見えます。しかし注意してみると、それぞれに独特の枝分れのしかたがあり、冬芽の形も異なっていることがわかります。中には、前年の果実（b, d）がそのまま残っているもの、やがて春に咲く花序（a, c, e, f）が明らかに認められるものがあります。身近に見る機会が多いと思われる落葉樹の冬芽をここにとりあげてみました。何種類わかりますか。（いずれも附属植物園内にあります。）

正解：1. ミツマタ（ジンチョウゲ科） 2. レンゲツツジ（ツツジ科）
3. フジ（マメ科） 4. ソメイヨシノ（バラ科） 5. ウメ（バラ科）
6. コクサギ（ミカン科） 7. イチョウ（イチョウ科） 8. カシワ（ブナ科）
9. バッコヤナギ（ヤナギ科） 10. ニシキギ（ニシキギ科） 11. イロハモミジ（カエデ科）
12. ヤブデマリ（スイカズラ科） 13. マンサク（マンサク科） 14. ハンノキ（ニレ科）

附属植物園 邑田 仁

英国で英語について思ったこと

浜 口 宏 夫 (化学)

1977年から79年にかけて二年間、英国のケンブリッジに滞在したが、その間言葉がうまく通じない不便さをいやというほど味わった。出かける前には、所属していた研究室（当時の島内研究室）を訪れる外国人たちと何とか意志の疎通ができていたから、英国でもそう不自由はすまいとタカをくくっていた。日本に来ているお客さんたちは、格別にゆっくりと話し、注意深く聴いているのだということに気がついたのはずっと後のことだった。ところがいざ行ってみると、言語の障壁は想像していたのよりずっと大きかった。特に聴く方が難しく、ケンブリッジでの初日に口座を開きに出かけた銀行で、受付嬢の喋る英語が全く聴きとれずに往生した。止むを得ず最初の三カ月間毎日LL (Language Laboratory, 後注)に通って、英語を聴き話す練習をしたし、週に二回の個人レッスンは結局一年以上続けた。一説によると現地人のガールフレンド（もしくはボーイフレンド）をつくるのが言葉が上手になる秘訣なのだそうだが、大和撫子との行きがかりや甲斐性の問題もあって、その有効性を確かめることはできなかった。二年目に入るところから、一对一の会話ではさほど不自由を感じないようになったが、例えば午後のお茶の時間に研究室の人達が一つのテーブルを囲み、冗談をとばしながら談笑している時などには、話の進行について行けず大いに疎外感を味わった。こういう時は自分が英語国に生まれなかったという客観的事実の重さ（これは日本で生活していたら絶対にわからない）をひしひしと感じていた。

我々非英語国国民にとって甚だ遺憾なことながら、国際共通語としての英語の地位は揺るぎなく

確立されており、近い将来これに取って代わるものが出現することは考えにくい。また我々が、研究生活においてはむろんのこと、一般社会生活においても諸外国との交流を深めて行かなければならないのは明白であるから、意志伝達的手段としての英語の重要性はますます高まって行くに違いない。しかるに、少数の才能豊かな人達を除けば我々日本人の英語での意志伝達能力は極めて低く、ほとんど先天的言語障害と言ってよいほどである。このような状況下で、大学での英語教育が従来のままの姿であってよいとはとても思われぬ。

私は英語教育を学問から切り離して、純粋な機能トレーニング（あるいは言語障害の矯正訓練）と考えるべきだと思う。教養学部の体育実技の時間は、将来学生が健全な社会生活を営んで行くのに必要不可欠な基礎体力を養う目的で設けられていると理解している。それなら、将来学生が国際社会において不自由を感じないで活躍するために必要最小限な基礎知力としての英語、それを身につけさせるためのトレーニングが大学で行われても少しもおかしくないと思う。ガラス (glass) と芝生 (grass) の区別ができない学生と、腕立て伏せや腹筋運動のできない学生はある意味で同列なのではないか。私はケンブリッジのテニスクラブで、芝生コート (grass court) と言おうとするたびに、舌の行きどころをいちいち考えていたのをよく憶えている。この二つの言葉を話し分ける訓練をしていなかったからで、いくら頭でわかっていても、実際口から出てこなければそれこそお話にならないのである。

奇妙なことに、日本での英文学研究では、聴き話すトレーニングがさほど重要視されていないよ

うに見受けられる。何故なら、「英語は喋れなくても英文学の研究はできる」という趣旨のことを留学中の英文学の先生方から幾度となく聞いたし、事実彼等はあまり英語を喋らなかつたからである。このような考え方が、大学での英語教育の機能トレーニングとしての側面を不当に軽視することにつながってはいないか。大学は学問を教える場であつて、機能トレーニングは例えば各種学校で行うべきものであると言う名目のもとに、大多数の学生が必要としている基礎知力の育成がおろそかにされてはいないだろうか。

私は中学・高校の六年間で、英語の読み書きの基礎的能力は相当に養われていると思う。テレビの刑事コロンボ氏のように、「She don't know nothing」などと言う学生の数は極めて少ないに違いない。だから、大学での英語教育ではその大部分を、聴き話す能力の養成に費やしても良いのではないだろうか。聴き話す能力を養うのに一番有効な方法は英語国に住むことである。次は英語国民から直接教わることであらう。しかし、これ

らをすぐに大学の英語教育に取り入れるのは困難である。唯一の現実的方法はLLを大幅に活用することであると思う。テープレコーダーを相手にボソボソとやるのは、私自身最初は気が進まなかつたけれど、慣れるにつれて随分と効果があがってきた。特に、書かれている言葉を繰り返して聴き話すことにより、口語としてのカンのようなものがついてきたと思う。具体的にどのようにしてLLを教育に取り入れるかはここで議論すべきことではないと思うが、私は英語の正規の単位として、しかも必須単位としてLLを使ったコースを設けても良いと考える。さらに、このようなトレーニングは理学部から理系大学院でも引き続いて行われるべきものであると思う。

注) LL. カセットテープレコーダーを相手に会話の練習をする設備で、自分の話す声を録音して手本と聴き比べるなど、種々の操作を行える。本郷キャンパスでは中央図書館内に設けられており、学生、職員は何時でも利用することができる。

物理学教室に着任して

井野正三(物理)

この6月より東北大学金属材料研究所から理学部物理学教室に移って参りました。新緑が一段と濃くなった頃で、構内を歩くと鬱蒼とした大木や古い赤レンガの建物がこの大学の長い歴史を物語っているように見えました。当物理学教室と金研は、本多光太郎先生以来古くから深い関係にあり、また私の専門分野の電子回折では西川研究室においてかの有名な菊池正士先生による世界最初の高速度電子回折の実験が行なわれた所でもあり*、何だか先祖の故郷に来たような気分になりました。

金研のような研究所では専門的研究に専念する

ことができるという利点がありますが、その分だけ知識が片寄ってしまうこともあります。私などがその例で、狭い分野のことしか知らない典型的な専門ばかりです。このような者が学生を教育する資格があるのかどうか一寸不安を覚えるのが現在の偽らざる心境であります。しかしながら東大には立派な先生方が多勢居られるので御指導をうけながら何とかするのはないかと勝手に楽観しております。

私の専門は表面物理学ですがこれは固体物理学と化学の境界に位置する分野と考えられます。殆

んどの固体は原子が規則的に並んだ結晶構造になっており、固体物理学はこれらの結晶構造や化学結合状態を解明しその構造と電気的、磁氣的性質などの関連を明らかにする学問であります。三次元的な固体についてはすでにかなり詳細な研究がなされてきております。ところが結晶の表面の数原子層の所の原子配列構造を調べてみると内部の構造とは異なった構造になっていることが明らかにされ、最近になって急に注目されるようになりました。例えばSiの(111)面では内部の構造の単位胞の7倍の大きさの周期を持った、“7×7構造”とよばれる表面に特有の二次元的な構造が形成されます。更にこの表面に金属などの異種原子を1原子層程度吸着させると、その吸着量と結晶表面の温度に依存して多種多様の超格子構造が形成されます。これはAとBの物質を混ぜ合わせて合金や化合物を作るとその組成と温度に依存して様々な構造が生じ、これらの様子が一つの状態図で表わされると全く同様なことあります。このように、数原子層しか関与していないと考えられる結晶表面においても、そこでくり広げられる物理化学的現象は内部の三次元的な現象と比べても決して劣らぬ程豊富な内容を含んでいることを物語っております。また三次元的固体においては内部要因が多少変化しても結晶構造までは変化しないような場合でも、表面ではそれらの要因が表面にしわ寄せされるような効果が生じ、表面の構造や物性の変化となって現れる傾向があります。表面はそれだけ構造敏感であると云えます。それ故表面構造や物性を研究することにより固体物性の基礎をより深く理解するのに好都合の舞台であるとも見做されております。更に自然界における物質の変化する過程をみると、殆んどの場合に何らかの形で、表面ないし界面が関与して進行しているのでこの点からも非常に興味ある研究対象です。

表面物理学はこのように学問的見地からみて興味があるばかりでなく、応用の面からみても極めて重要であります。“日本の産業の米”となりつつある半導体や金属工業、エネルギー問題に関係している触媒工業、原子炉、核融合炉の問題、新機能材料の開発、更に酸化、腐食、焼結、熔接、接着、破壊、摩擦、潤滑など、現代工業のあらゆる工業技術に密接に関係しております。

さて表面構造の解析においては、三次元の結晶構造に対するX線回折のような有力な方法がなく、まだ具体的な原子位置の決定をすることができないままであり、従ってその物性の解明もまたなかなか進展しないという状況にあります。そこで私の研究室では第1に種々の方法を駆使して表面構造の解明を試みる計画を立てております。例えばLEED(低速電子回折)やRHEED(反射高速電子回折)により、表面構造の周期性や対称性、単位胞の大きさなど長距離規則性を調べ、イオン線、原子線散乱などにより短距離規則性を解析し、更にXPS(X線光電子分光)やUPS(紫外光光電子分光)により化学結合状態や電子構造を調べ、表面構造を総合的に解明したいと考えております。第2には上述のような方法で表面構造を充分確認した上でその表面の格子振動、磁性、電気伝導、吸着現象、触媒作用などの諸物性の研究も行ないたいと思います。更に第3にそれらの結果をふまえて工業的応用面からの研究も行ないたいと考えております。これらの研究に必要な種々の装置はなるべく、自らの手で作り、改良・開発するよう心掛けるつもりです。このような考えで学生に物を作る楽しみや自然を探究する喜びを教え、少しでも独創的研究が育つような環境作りを行なってゆきたいと考えております。また私自身も学生といっしょに実験を続けてゆくつもりです。

注 *当時西川研究室は本郷の物理教室と理研にあり、実験は理研で行なわれた。

坪井先生のこと

齋藤正徳（地球物理）

本学名誉教授坪井忠二先生が突然お亡くなりになられました。昭和57年11月19日のお午近くのことでした。後ほど奥さまから伺ったところでは、その日も普段と全くお変わりなく、ただ虫が知らせたというのか、いつものように語学振興会に出勤されずに、今日は一日家で仕事をするとおっしゃって書斎に入られてしばらくして気分が悪くなられたそうです。御葬儀は11月22日、小石川伝通院で執り行われ、2千人余りの同学の士、後輩が先生との別れを惜しみました。またその節には、日本学士院長有沢広巳先生、本学総長平野龍一先生、本学名誉教授茅誠司先生、本学教授友田好文先生、日本測地学会、地震学会から弔詞が捧げられました。

坪井先生は明治35年9月9日、重陽の節句の日にお生まれになり、大正15年東京帝国大学理学部物理学科を御卒業後、直ちに地震研究所に入れ

ました。昭和3年助教授、16年教授に昇任され、昭和18年に理学部地球物理学教室に移られました。以来、昭和38年に停年により退官されるまで、30年以上の長い期間にわたり単に理学部だけでなく我国の地球物理学界において、数多くの後進を育成されました。この間、昭和27年には日本学士院賞を受賞されたこと、昭和36年から38年までは理学部長を務められたことは、我々の記憶に新しいことでもあります。本学を退官後は、国立国会図書館の専門調査員ならびに司書監を昭和43年まで務められ、その後、財団法人語学教育振興会理事として、国際人の養成と国際間の文化交流に尽くされてきました。

坪井先生の内外における活躍について述べるだけの力はありませんので、私の眼に映った、というよりは遠くから仰ぎ見た坪井先生の印象を記してみたいと思います。私が本郷へ進学してきたの



かつての「秘書嬢」たちに囲まれて御機嫌の坪井先生
昭和57年10月13日地球物理教室友田さん撮影

が昭和33年ですから先生のほとんど最後の学生ということになります。それまで先生が書かれたもの、ことに寺田寅彦先生について書かれたものなどから勝手に作り上げた、カミソリのように怖い先生というイメージとは随分違うことに、まず驚きました。後に坪井研究室で勉強させていただくようになり、一つ上の世代の先輩たちの話を聞いたり、またその後、地震研究所時代を含めた坪井研究室のコンパなどで大先輩たちから聞かされたところによると、やはり昔は随分と怖い先生らしかったので、我々のような若い世代は何となく損をしたような気分になったものです。

コンパといえば、盃を手に「君い、こういう話があるんだよ」と実に楽しそうに、また嬉しそうに話を切り出されるのが今でも目に浮かびます。その話というのは地震の話であったり、重力の話であったり、あるいはこういう言いまわしを英語で何というかという話であったり、あるいは右と左の話であったりと、話題は様々でしたが、先生にとっては、一見何でもないと不思議を見出したり、一見不思議に見えるけれどもこう考えるとよく分かる、ということが楽しくて楽しくて仕

方がないようでした。今でもよく覚えているのは、地震というのは今度はここで起きてやろうと思って起こっているのだろうか、という言葉です。例えば、面倒な計算をして、この地震はこういう工合にして起きましたと、先生の言葉でいうと地震の「説明」をすると、この地震はどうしてそこで起きるということを（地震それ自身が）知っていたのかね、という工合です。

坪井先生は非常にお元気な方で、大学時代も、退官後も、御加減が悪いなどという話は聞いたことがありませんでした。暑い夏、皆がへばっているときでも、重陽の生まれは夏に強いとばかり益々元気になるような先生でした。口の悪い連中は、坪井研究室で最後に残るのは先生だ、などと蔭口を叩いていたものです。先生の突然の御不幸は我々にとっては全く思ってもみなかったことでした。しかし一方では、いかにも先生らしい生き方だったという気がします。江戸子はそうどんくさくしてられないんだよ、というおつもりなのでしょう。

先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。

「三崎の重さん」のこと

木下清一郎（臨海）

三崎の臨海実験所で、所員や来所される研究者から、「重さん」とよばれて、長い間親しまれてきた元技官の出口重次郎さんが亡くなられた。まもなく88才の誕生日をむかえようという、去る10月11日のことであった。

出口さんは、昭和2年に臨海実験所に奉職されて以来、昭和47年に嘱託を退かれるまで実に45年に亘って、動物の採集ひとすじにうちこんでこられたことになる。退職されたのちも、折々、実験

所をたずねられ、杖をひいてわれわれを訪なわれた姿は、まざまざと目に浮ぶ。

実験所で仕事をした人で、出口さんの世話にならなかった人はない。どんな動物も、出口さんの手にかかるとうすうと姿を現わし、研究者の手に渡される。その援けをかりて研究を完成することのできた人の数は、知ることできぬ程であろう。しかし、この名人的技術は永い間の苦心と経験にもとづくものであった。若い出口さんが、



磯で採集する出口さん。この様子からみると、おそらくムカシゴカイという原始的な環形動物をとっておられるのではなからうか。

はじめて実験所の門をくぐった頃、「三崎の熊さん」こと青木熊吉翁が大先輩の採集人として君臨しており、珍しい動物を海の中から意のままにとり出していたが、採集には出口さんを決して伴おうとはせず、どこへ行けば何がとれるものやら皆目見当がつかなかったそうだ。出口さんは遂に熊さんが何かをとりに出たと見るや、実験所わきの山へ登り、遠目鏡で行方を追い、やがて帰ってきた熊さんの獲物とつき合わせて、ははあ、あそこにはこれが棲むな、と合点したという。生得の動物好きにあわせて、こうして得られた経験をもとに、三崎の海はわが家の庭同様に知悉し、熊さんのあとを襲うこととなった。出口さんの採集した生物で、これまで極めて稀にしか得られぬものが幾つかある。かつて、三崎に居られた磯野直秀氏（現在慶応大学教授）の記憶によると、ホンダワラコケムシ、カラスキセワタなどがその一部であるという。

そういう具合だから動物にくわしいことはもちろんで、しかも、その名前をラテン語の学名でそらんじておられた。動物学教室に入りたての新米学生は、臨海実習にひきつれられて磯にでたとき、

出口さんの口から学名がぼんぼんでくるので目を白黒させられるのが常であった。私も実習室に帰って分類表をくって見て、あとから合点した一人である。

研究者の目的を理解して、その欲する条件に適った動物を採集してくれたり、工夫して動物を飼っておいてくれたりすることも、皆の感謝のまのであった。私のように発生学をやる人間にとっては、時期はずれになっても、まだ卵をいっぱい持ったウーを持ってきてくれる出口さんは、まさに救いの神様とうつった。出口さんの一つ話に、岡田要先生が再生の仕事をしておられた頃、Autolytus というゴカイの一種が過剰再生をして、6本に枝わかれしたものを発見したら、三崎の町へつれていって芸者をあげておごる、と言われたという話がある。出口さんはとうとうこれを見つけたし、岡田先生を喜ばせたそうであるが、芸者の件は辞退された由で、おそらく、出口さんの好きな甘いおしるのごちそうあたりに収ったのだらう。

出口さんが勤務された45年は、実験所にとって平穏な時ばかりではなかった。ことに戦争中は海

This is a marine biological station with her history of over sixty years.
 If you are from the Eastern Coast, some of you might know Woods Hole or Mt Desert or Tortugas.
 If you are from the West Coast, you may know Pacific Grove or Puget Sound Biological Station.
 This place is a place like one of these. Take care of this place and protect the possibility for the continuation of our peaceful research.

This note was found pinned on the door of the University of Tokyo Marine Biological Station building at a market before the war, March 20, 1945, in Washington, D. C. by one of Professor Okamoto's TWENTY.

You can destroy
 the weapons and
 the war instruments
 But save the civil equipments
 for Japanese students.
 When you are through
 with your job here
 notify to the University and
 let us come back to our
 scientific home
 The last one to go

敗戦時に実験所をまもった置手紙。

軍の特殊潜航艇基地として接收され、出口さんは残った僅かの所員とともに、近くの小網代の倉庫を借りて、仕事をつづけ、標本類も守って下さった。敗戦の混乱時には、海軍の狼藉もかなりのものであったようで、所内に機雷がころがっているような有様だったという。当時の岡田所長が、あらかじめ出口さんに一枚の貼紙を用意して渡され、それにはこの建物は大学の施設である旨がしたためてあったそうであるが、出口さんが早速にこれを玄関に貼りに行ったところ、将校がこれを見ておっとり刀でやってきて脅し、破りすてたという。

やがて相模湾一杯に米軍の艦艇があらわれると、威張っていた日本軍はくもの子を散らすように居なくなってしまう。米軍が再接収をしようとして、実験所を訪れた時に、出口さんは当時長井に住んでおられた団勝麿氏の宅まで自転車をとばした。団さんは当時の助手で、のちに東京都立大学の学長になられ、現在も実験所で研究をつづけておら

れる方である。二人してとって返し、団さんは毛筆で一文をしたため、実験所の玄関においた。米軍の将校はこれを司令部に送り、実験所はまもなく大学の手にもどることになる。この紙片はやがて米国にまで送られることになるが、米国の生物学者たちは、この文章のくせなどから、書き主が誰であるかを覚り、Dr. Danの健在を知ったという。この文章は生物学者の間で、“The last one to go”として名高く、今もWoods Holeの実験所の壁にかかり、戦争によってもそこなわれなかった日米の研究者のきずなの証として残されている。

返還後の所内を旧に復する作業は、おそらく言語に絶するものがあったと思うが、当時の所員とともに出口さんも苦勞して下さったおかげで、今日、その標本類ともども、我々の仕事の間を維持できているのを忘れることはできない。

出口さんはその永年の功績に対して、昭和39年

には黄綬褒賞をうけられ、また、昭和57年には日本動物学会から感謝状が贈られている。

亡くなられる床の中でも、私たちと動物の話をされた。晩年には目が不自由となられたが、前にも名をだした磯野さんがみずからテープに吹きこ

こんだ実験所の昔の歴史(「自然」の原稿を読まれたもの)をくりかえし聞いておられた。実験所で仕事をした研究者の一人一人の「重さん」への愛惜の情はつきないものがある。

《 学部消息 》

教 授 会 メ モ

11月17日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 昭和58年度文部省内地研究員の受入れについて
(4) 寄附の受入れについて
(5) 人事委員会報告
(6) 教務委員会報告
(7) 企画委員会報告
(8) 入試教科目検討専門委員会報告
(9) その他

12月22日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 寄附の受入れについて
(4) 人事委員会報告
(5) 会計委員会報告
(6) 教務委員会報告
(7) その他

〔次回以降予定：

昭和58年1月19日(水) 13時30分より
2月16日(水) 同 上
3月16日(水) 同 上

◎同日の教授会に先だち13時より、同場所〔理・4号館会議室(3階1320号室)〕において、「大学等の理科系教官のコンピューターによる研究活動度の評価への試み」について、有馬教授(物理学教室)からお話しがあり、ご希望の方の参加があった。

行 事 予 定

12月28日(火) 御用納め
1月4日(火) 御用始め
1月15日(土) } 共通第一次試験
1月16日(日) }

3月4日(金) } 第二次学力試験
3月5日(土) }
3月28日(月) 卒業式
3月29日(火) 学位授与式

名誉教授との懇談会

恒例の理学部名誉教授懇談会が、平野総長をお招きして、11月27日（土）正午から、学士会分館において、午餐をかねて行われた。

本年は、木村健二郎先生（86才）をはじめ多数の先生方と江上学部長、田丸元学部長および田村評議員など44人の出席を得て、近年になく盛会でした。

田村事務長の開会の後、江上学部長から、最近の理学部の研究の一つとして附属中間子科学実験施設の紹介があり、同施設長山崎教授による『中間子科学実験施設の現状について』と題する特別講演が熱心に行われ、今後の研究の進展に大きな注目と期待がよせられた。

中庭で記念撮影の後、江上学部長から、ごあいさつと化学館C棟の新築工事等学部の近況報告があり、木村先生の音頭による乾杯につづいて、平野総長からごあいさつがあった。平野総長は、創

立100年記念の建物の本郷記念館及び国際学術会館の建設を評議会で決定したこと、理工系の実験設備のための新キャンパスを求めていること、若手研究者の養成の問題を検討していること等のご報告があり、学術会館が完成した際には、ロビーでお寛ぎいただきたいと話された。また、田丸教授（総長特別補佐）から、有馬教授（物理）を中心に行っている学内共同研究、『理系教官のコンピューターによる業績評価の試み』の紹介があり、反省として、東大の先生はもう少し忙しくなくして勉強しなければいけないと発言があった。

名誉教授の先生方からも近況報告や学部への要望などのご発言が相つぎ、終始和やかな中に次のようなご発言があった。

（木村先生）「こういう楽しい会をはじめることを考え出して実行された一番はじめの理学部長だった坪井忠二先生が亡くなられたのは残念なこと



である。」

(山内先生)「坪井君とは高校から一緒だったが、友だちが亡くなるのは心細いことで、自分もそろそろと思って、不養生して毎日酒を飲み、運動もしないでいるが、まだどこも悪くならず、仲々思うようにならない。」

(茅先生)「私は84才になるが、永生きの秘訣は、仕事をする時に頭を使っても気を使うなと考えてきたが、仕事を段々に整理したら、気を使う仕事ばかりが残ってしまって非常に困っている。去年、中国の薬の名所昆明へ行ったときに『青春回復』と云う薬があったので念のため買ってきて、家内と二人で朝三粒、夜三粒飲んでいる。あまり若返りすぎたら、お互いに気をつけて止めようと云っているが、薬が無くなるとおみやげに買ってきてくれる人もあり、青春回復が今も続いている。」

(小谷先生)「今年7月に、東京理科大学々々3期12年の任期を終えて、全く自由の身になったが、この間に東大で経験しなかった、根廻しに代表されるような日本的な社会を経験したが、自分は頑固であり変っていない。」

(渡辺先生)「若い頃からサッカーで足を鍛えていたが、パーキンソン氏病に罹り、体の調子のいい時に鉱山採集に行っている。古い資料をすぐ使える形で保存する総合資料館をもっと充実してもらいたい。」

(赤松先生)「昨年分子科研所長を70才停年でやめたが、3年前に喘息に罹り、これを2年かかって克服したところ、今度はパーキンソン病になった。この病気の原因は判らないから治せないが、現象は全部判っているので、研究室がなくなった替りに自分の体をラボラトリーにして、この病気をコントロール出来るようになった。医者も奇跡だと云っているのです、そのうちに“パーキンソンと親しむ法”とでもいう本を出そうかと思っているので、渡辺先生もがんばってください。」

(吉田先生)「学習院を3年前やめて今のところ元気ですが、何かむつかしい病気ができたら、お

近くの赤松先生にご相談します。」

(森野先生)「昔、赤松さんと化学新館をつくったが、もうそれも古くなって、いよいよ化学教室が新しくなると聞いて非常にうれしい。汚ない建物で化学実験の教育を受けると、ものを始末する習慣がつかなくて、机の上をせまくして、隅で実験をするようになる。狭い本郷を如何に有効に利用するか、これには、建物とともに内部設備を充実することが重要なので、現役の方をお願いしたい。」

(鈴木先生)「昨年、文化交流で中国へ行ってきたが、北京とちがって、杭州等の中国人が日本人とそっくりなので、日本人が蒙古系であるとは云われているが、中国南部からきたということを感じてきたので、注目すべきだと若い人達に云っている。」

(前川先生)「西アフリカ、マダガスカルの主食植物で、大豆より栄養価の高い“バンバラビーン”を小豆島で栽培してもらって、この秋4株残り、32粒収穫した。日本の食糧事情に何かプラスになればと思って、来年を期待している。」

(原先生)「植物の研究は永くかかり、在職中から20年かかったヒマラヤの研究のうちネパールの部分が3巻の本となり、大英博物館と東京大学との共同研究として出版された。これらに用いた資料は、総合研究資料館に入れるべきものであるがスペースがないので、よろしく願いたい。」

田村評議員から、久保先生が学術会議月報に書かれた老人研究所(老人による研究所)構想についての質問と、もし設立されたら入れていただきたいとの要望があった。

(久保先生)「老人研究所はエッセイをたのまれて、時々、山上御殿あたりでだべっていたことを記したものである。事態の急変があって私が日本学術会議会長になったが、10何年か前大学紛争で執行部が総辞職して学部長になった時のことを思い出した。」この後久保先生から、学術会議改革の問題についてご説明があった。

(桑原先生)「昨年から、現職の小中高教員の再教育の学校である兵庫教育大学で教えているが、物理というのは暗記ものであるという観念があるらしいので、身の廻りのこと、たとえば物体を水中に落した時の運動などを例にしてでも自然科学の面白さを先生方に教えようと思って実験している。」

(野田先生)「今年から名誉教授の1年生です。電通大学であまり化学を勉強したくない学生に、どう教えるかを勉強しております。」

このほかすべての名誉教授からのご発言があり、この懇談会を毎年継続して開催してほしいとの強い要望もあり、理学部の発展とご健康そして再会を誓い、閉会を惜しみつつ、午後3時30分散会した。

出席名誉教授

木村健二郎, 和田文吾, 山内恭彦, 鍋木政岐, 茅 誠司, 竹脇 潔, 小谷正雄, 彌永昌吉, 渡辺武男, 石田寿老, 藤田良雄, 森野米三, 前川文夫, 吉田耕作, 藤井 隆, 赤松秀雄, 原 寛, 田中信徳, 高井冬二, 鈴木 尚, 岩生周一, 門司正三, 今井 功, 河田敬義, 立見辰雄, 斎藤信房, 木原太郎, 久保亮五, 佐藤 久, 桑原五郎, 野田春彦 の各先生

(31名)

(文責 事務長補佐 神戸和雄)

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

◎泥棒がねらっている (盗難注意) ！

本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで泥棒 (盗難) の被害にあっています。あなたのちょっとした注意で被害をくいとめられます。

～最近被害続出～

人 事 異 動 報 告

(助 手)

所属	官職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
中間子	助 手	早 野 龍 五	57. 11. 1	昇 任	高エネ研助教授へ
中間子	助 手	西 山 樟 生	57. 11. 1	昇 任	中間子教務職員より
化 学	助 手	永 田 敬	57. 12. 1	採 用	
人 類	助 手	徳 永 勝 士	58. 1. 1	採 用	

(講師以上)

天 文	助 授 授	小 平 桂 一	57. 11. 1	昇 任	東大東京天文台教授へ
分 光	助 授 授	斎 藤 太 郎	57. 11. 1	昇 任	大阪大学(工)教授へ
物 理	助 授 授	佐 藤 勝 彦	57. 12. 1	昇 任	京大助手(理)より

(職 員)

化 学	用 務 員	杉 本 瑛	57. 11. 16	採 用	
物 理	事 務 官	当 山 千 鶴 子	57. 12. 1	配 置 換	経理部より
物 理	事 務 官	大 石 道 子	57. 12. 31	辞 職	自己都合
化 学	用 務 員	氏 江 正 一	57. 12. 31	勸 じ ょ う 退 職	
地物研	技 官	富 田 加 三	57. 12. 31	勸 じ ょ う 退 職	

(外国人特別招へい教授)

氏 名	国 籍	雇用期間	備 考
GASIOROWICZ		57. 9. 17	ミネソタ大学
STEPHEN GEORGE	ア メ リ カ	～	教 授
GRANT		57. 12. 17	

外国人客員研究員報告

所属	受入れ教官	国籍	氏名	現職	研究員期間	備考
物理	和田昭教授	アメリカ	John F. Brandts	マサチューセツツ大学教授	57.11. 2 ～ 57.12. 7	日本学術振興会 外国人招へい研究者
植物	駒嶺助教授	インドネシア	Estiti B.Hidajat	バンドン工科大学助教授	58. 3.21 ～ 58. 4.19	日本学術振興会 発展途上国との科学協力事業招へい研究者
動物	水野教授	インドネシア	L. A. SUTASURYA	バンドン工科大学講師	58. 1.10 ～ 58. 4. 9	”
地質	久城教授	フランス	Pierre Boivin	CNRS研究員	58. 1. 1 ～ 58. 6.30	
中間子	山崎教授	ドイツ連邦共和国	Georg M. Kalvius	ミュンヘン工科大学教授	58. 3. 8 ～ 58. 4.30	東大百年記念事業 外国人招へい研究者

東京大学職員の永年勤続表彰

57. 9. 30	附属植物園	宮入 勇 殿
57. 12. 31	化学科	氏江 正 一 殿
”	附属地球物理研究施設	富田 加 三 殿

勸奨による退職に際し表彰され、記念品が贈られた。

毎月 1 日は

「省エネルギー」

の日です。

海外渡航者

(10 月)

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	助手	三 明 康 郎	アメリカ合衆国	10.26~12.31	加速器改造後の実験のため

(11 月)

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
天文	教授	海 野 和 三 郎	インド	11.30~ 58. 1. 10	恒星対流層の研究実施のため
地物	助教授	松 野 太 郎	アメリカ合衆国	11. 7~11.14	日米セミナー「中層大気の力学」出席のため
情報	教授	国 井 利 泰	アメリカ合衆国	11. 1~11.14	COMPSAC '82 出席及び研究討議視察のため
植物	教授	飯 野 徹 雄	アメリカ合衆国	11. 7~11.12	日米科学技術協力事業「組換えDNA」にかかわる日米合同ワークショップ「真核細胞におけるDNAの複製と形質発現」出席のため
植物	助手	原 山 重 明	スイス	11.30~ 58. 12. 5	シュードモナス属のTOLプラスミドの遺伝生化学研究のため
素粒子	助手	小 林 富 雄	ドイツ連邦共和国	11.10~ 58. 3. 5	国際協同実験—電子・陽電子衝突実験のため
数 学	教 授	岩 堀 長 慶	シンガポール	11.15~ 58. 3. 22	代数学に関する調査研究のため
地物	助手	松 井 孝 典	アメリカ合衆国	11. 9~12.15	コンドリュールとその起源に関する会議, 1982年度アメリカ地球物理学連合秋季学会出席及び地球・惑星内部物理学研究のため
物 理	教 授	西 島 和 彦	インド	11. 7~12.19	場の理論における異常性の研究実施のため
人 類	教 授	埴 原 和 郎	アメリカ合衆国	11.24~12. 1	海外学術調査の対象地域諸国における受入の研究状況調査のため
中間子	助手	今 里 純	スイス	11.26~12.17	大強度中間子・反陽子ビームによる原子核・物性に関する調査研究(予備調査)のため

(12 月)

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	助教授	鈴木増雄	アメリカ合衆国	12.11~12.19	核融合プラズマにおけるカオスの統計物理の研究のため
化学	教授	不破敬一郎	台湾	12.12~12.19	中国化学会50周年記念年会出席のため
地物研	教授	福島直	アメリカ合衆国	12.29~ 58. 1. 14	MAGSAT報告会議出席, MAGSAT研究者との打合せ及び国際地球電磁気学, 超高層大気物理学協会 (IAGA) 事務連絡のため
情報	教授	国井利泰	アメリカ合衆国	12.14~12.22	インター・グラフィックス '83 に関する打合せのため
物理	助教授	江口徹	イタリア, ドイツ連邦共和国	12.12~12.29	非摂動的場の理論と量子色力学会議出席及び高エネルギー物理学に関する研究連絡のため
動物	教授	江上信雄	シンガポール	12.29~ 58. 1. 2	動物学に関する研究連絡のため

あなたです!

火事を出すのも

防ぐのも

編集：

飯 高	茂 (数学)	内線	4053
矢 崎	紘 一 (物理)		4123
松 野	太 郎 (地物)		4299
露 木	孝 彦 (化学)		4357
尾 本	恵 市 (人類)		4482
